第58号

令和１年

１０月１日

題 字
植 木　満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人
東進会会長 飯塚　哲哉

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町２－７－４　砂防会館別館６階
宮崎法律事務所　気付　東進会事務局
TEL（FAX）　０３－５４２１－５３２１
E－mail：toshinkaisecretary@gmail.com
ホームページ　https://to-shin-kai.jimdo.com/

傘寿を迎えられた昭和３１年卒の皆様

■令和１年度総会・懇親会
演　奏　　土浦一高吹奏楽部
演　舞　　土浦一高応援指導部
講　演　　長　有紀枝（昭和５７年卒）
落　語　　立川　志のぽん　こと
廣瀬　敦（平成７年卒）

■総会講演録
「人間の安全保障の視点から考える
外国人労働者や難民・子弟の受け入れ問題」
長(おさ) 有紀枝 (昭和５７年卒)
（立教大学教授）

■総会・懇親会出席者

■「上杉城下として栄えた米沢探訪」
廣瀬　巳良（昭和４０年卒）

■「ヨーロッパ一人旅」
逆井　誠（昭和４４年卒）

■リレー放談（第８回）
「農業を軸とした地域創造型
プラットフォームへの挑戦
伊東　明彦（平成５年卒）

人間の安全保障の視点から
考える外国人労働者や難民・子弟の受け入れ問題
―身近な生活空間の国際化・多様化に向けて

長(おさ)有紀枝（昭和57年卒）

現在、私は大学の教員と国際協力ＮＧＯ「難民を助ける会(ＡＡＲＪａｐａｎ)」の理事長という二足の草鞋を履いて活動しています。本日は、その双方の立場を行き来しつつ、皆さんとともに、私たちの身近な空間に存在する、外国人労働者や難民子弟の受入れについて、お話をしていきます。限られた時間であり、私が特に関係している難民問題に軸足を置いてお話することをお許しください。

私たちが生きている国際社会は、主権を有する多数の国家が併存する、主権国家体制といわれるものを基調に置いています。そもそも主権国家体制は、国家がその国民を守ることを前提にしていますが、近年破綻国家・失敗国家が出現し、国家の安全保障のみでは担保されない、人間の安全保障の確保が大きな課題となっています。ここに未曽有の難民問題の原点もあります。他方で、この体制の前提にあるのが、厳格な国境管理であり、また難民の認定・庇護の付与は、各国の主権の下にある事項です。以上を前提として、まず、難民(Refugees)という言葉の定義を確認します。

私たちが口にする「難民」は、実は３つの異なる概念から成り立っています。まず日常会話の中の「難民」（ネットカフェ難民とか、家庭内難民とか）、次に難民条約で定められた法的な用語としての「難民」（条約上の難民）、そして条約上の定義には当てはまらないものの紛争などで国を追われた人々をさす「広義の難民」（大量難民・紛争難民）です。

毎年６月20日の世界難民の日に国連により統計が発表されますが、講演時点での最新の統計(２０１７年末時点)によれば、紛争、暴力、迫害により世界で強制移動を強いられた人の数は６８５０万人。５年連続で増加し、２秒に１人、毎分30人、一日あたり平均４万４５００人に相当します（講演後に発表された、最新の、２０１８年末の統計では７０８０万人）。世界各地で難民が増え続ける一方、難民を受け入れ、支援する国の数は減少し、現在、難民の６割をわずか10カ国で受け入れているという現実があります。

では、日本の状況をみてみましょう。難民の認定は、法務省の入国管理局が所管しています。難民条約に加入している日本が受け入れの義務を負うのは難民条約上の難民（認定難民）のみですが、受け入れ義務はないものの日本が国際社会の一員として、受け入れを表明した、いわゆる広義の難民と呼ばれる人も日本に滞在しています。１９８２年の難民認定制度導入から２０１８年末までの申請数は７万１１６８件、この内、条約難民として認定されたのはわずか７５０人。講義の難民（含む第三国定住難民）は１万１４９３人（インドシナ難民・ミャンマー難民）、その他の庇護（人道的配慮）２６２８人です。

次に、日本の難民受け入れの課題を考えます。まず、条約難民の認定率の低さに驚かれたと思いますが、この問題の背景にあるのが、難民申請者の急増と、世界の難民出身国と日本の難民の出身国のギャップです。先の国連の統計によれば、２０１７年末時点で、難民出身国のトップ５はシリア、アフガニスタン、南スーダン、ミャンマー、ソマリアで世界の難民の68％がこの５カ国に集中しています。他方で、日本で難民認定を申請した方々の国籍上位国は、同じ２０１７年を見ると、フィリピン、ベトナム、スリランカ、インドネシア、ネパール、トルコといった国々です。認定率の低さにこういう背景があるとはいえ、それでもなお、日本の認定制度が非常に厳しいのも事実です。さらに日本は、他の先進国と異なり、第三国定住で受け入れる数も圧倒的に少数です。

私たちはどのような国で、地域で生きていきたいでしょうか。どれほどの規模で、どのような人間を、どのようなステイタスで受け入れるかは、受け入れ国の国としての在り方を問い、規範や価値観を体現する重要課題です。

茨城県在留外国人の状況等（平成29年12月末現在法務省統計）をみると、在留外国人数は６３，４９１人で全国10位（県全人口比2.2％）、その１位はつくば市、土浦市が３位、そして、私の出身の常総市が２位に入っています。

先の問いの答えを改めて考えてみます。難しい問いのようですが、実は答えは意外と簡単なように思います。もしも、自分や、自分の大切な家族、友人、知り合いが難民になったら。そう想像してみたらどうでしょう。私は単純に誰かに助けてほしい、と思うと思います。必ず故郷に帰りたい、だから困った時の短時間でよいから、助けてほしい。もし、それが普通の感覚であるならば、自分が困った時だけ助けを求め、他人が困っているときには知らないふりをする、というのは筋が通らないと思います。そんな単純なことを考えたら、自分たちのできる範囲で協力をする道を探るのが、一つの答えではないでしょうか。

難民を助ける会も、１９７０年代後半、日本に流入したインドシナ難民を前に、設立者の相馬雪香が、「困ったときはお互い様」という精神で会を立ち上げました。どうぞ皆様私たちの活動もお見守りください。

南スーダン難民の少女と（ウガンダの難民キャンプにて）

令和１年度　総会・懇親会が盛大に開催されました
令和１年６月９日（日）　学士会館にて

土浦一高吹奏楽部の演奏

進修同窓会大野会長挨拶

土浦一高応援指導部の演舞

東進会飯塚会長挨拶

講演する長立教大教授

司会の伊丹さん

立川志のぽんさん

当番幹事の三谷さん

校歌斉唱をリードする応援指導部 OB の皆様

総会出席者
（敬称略・順不同）

ご来賓の皆様

進修同窓会東葛支部
齊藤　康雄　支部長

茨城県営業戦略東京
渉外局　中村修課長

進修　同窓会
大野　金一　会長

土浦第一高等学校
植木　邦夫　校長

東進会会員

S31　中村　信秀

S31　長島　弘道

S31　菊地　清

S31　色川　嘉一

S29　西川　恵美子

S27　坪井　洋

S33　沼里　征二

S33　關井　康雄

S32　服部　彧雄

S32　伊藤　實

S31　渡辺　隆

S31　山本　栄男

S31　山田　晴康

S38　塙　弘道

S38　中島　穣

S38　海老沢敬一郎

S37　矢口　照雄

S37　南　隆男

S37　北川　正之

S36　若山　宏

S41　飯塚　哲哉

S41　相澤　興二

S40　廣瀬　巳良

S39　山田　忠敬

S39　鈴木　達

S39　久保内　聡子

S38　野村　ルナ

S41 中島　徹

S41　高山　了

S41　甲田　三重

S41　川北　一郎

S41　浦野　慈夫

S41　今泉　房子

S41　今井　修二

S43　木村　繁夫

S41　安井　恵子

S41　宮本　英尚

S41　久松　信明

S41　野口　卓夫

S41　仁平　典子

S41　長門　琴

S43　渡辺　孝男

S43　柳沢　成二

S43　宮崎　好廣

S43　光永　研一

S43 幕内　邦夫

S43　常山　浄子

S43　鈴木　厚

S44　助川　博夫

S44　熟田　一久

S44　逆井　誠

S44　岡崎　孝宣

S44　大関　亨

S44　阿見寺 俊洋

S43　渡邊　愼一

S48　井坂　公明

S46　堀越　幸雄

S46　小野　幹夫

S45 鈴木　良治

S45　猪俣　勝弘

S44　福田　成志

S44　永井　博

S48　本橋　浩道

S48　福田　淳一

S48　桜井　克信

S48　君山　利男

S48　神立　哲男

S48　海上　裕之

S48　小坂部　充功

S50　川島　敦子

S50　加藤　祐司

S50　小野村　敏之

S50　内田　敬子

S50　穐山　富美子

S48　吉田　正史

S48　谷口　泰士

S56　井川　忍

S55　藤田　和子

S55　櫻井　成一朗

S55　小野　雅代

S52　海野　章

S50 星川　美代子

S50　花上　克宏

H7　青木　智典

H6　五十嵐　朝青

H5　伊東　明彦

H3　島田　博之

S61　三谷　八寿子

S57 長　有紀枝

S56　酒井　学雄

お知らせ

・第１６回アカンサスクラブ
　日時：令和１年12月５日（木）午後６時３０分
　場所：ザインエレクトロニクス会議室

・第１７回アカンサスクラブ
　日時：令和２年３月５日（木）午後６時３０分
　場所：ザインエレクトロニクス会議室

・東進会総会
　日時：令和２年６月７日（日）午後12時
　場所：学士会館

皆様のご参加をお待ちしています

H7　山本　厚

H7　廣瀬　敦

H7　緒方　浩一

H24　岡野　峻平

H21　内藤　雅之

H9　金子　敏明

上杉城下として栄えた「米沢」探訪

廣瀬　巳良（昭和40年卒）

米沢は山形県の最南端に位置し、「最上川」の源の吾妻連峰の裾野に広がる米沢盆地にある。江戸時代、上杉家のもとで独自文化を育み、発展を遂げてきた歴史が息づいている。第９代米沢藩主「上杉鷹山」は財政が大逼迫していた米沢藩に宮崎県の秋月家から藩主として迎えられ、自ら大倹約の改革を断行するとともに数々の殖産振興政策を展開し、藩財政を立て直した経営業績が知られている。

「なせば成る　なさねば成らぬ何事も
　成らぬは人のなさぬなりけり」

「国家は先祖より子孫へ伝え候　国家にして我私すべきものはこれなく候」

この旅は、平成30年12月6日のアカンサスクラブ懇親会から始まった。大野先生（昭和31卒）と渡邊愼一さん（昭和43卒）と同席した時に「一高仲間でたまには旅行をしたい」との話題がでた。渡邊さんから「同期が米沢に住んでいて、以前米沢を案内してもらった。温泉良し酒良し史跡良しの所」と紹介された。早速、米沢市立病院事業管理者をされている渡邊孝男さん（昭和43卒）に連絡する。

1月に入り渡邊さんに米沢探訪のプランを作って頂き、催行日は令和元年5月11日（土）から12日（日）とした。茅葺き屋根の宿　白布温泉「西屋」に12名分3部屋を予約、参加者の募集を始めた。参加者は昭和29卒から昭和51卒の8名（女性2名、男性6名）となった。

5月11日米沢駅10時半集合。晴天で暖かい朝。駅から歩いて、個人が収集した甲冑・火縄銃・鎗・屏風など米沢藩関係の文化財が収納されている「宮坂考古館」を見学する。

続いて、上杉城趾本丸跡にある上杉神社に到着。広々とした城趾を歩き上杉謙信を祀っている上杉神社を参拝する。

境内を抜けお堀を回り、昼食場所の上杉伯爵邸へ。庭を散策して伯爵邸の庭が見晴らせる二階の客間で献膳料理。献立は、米沢牛のいも煮・丘ひじき辛子和え・うこぎご飯・鯉のことこと煮・塩引寿司・冷汁・おみ漬け・舘山りんごの寒天。のんびりゆっくりとした時間が流れる。

食後は城趾にある伝国の杜・上杉博物館を見学する。この博物館は昭和30卒の関信男氏の設計である。

少し歩いて上杉家の御用酒屋「東光の酒蔵」を見学。酒蔵は酒造資料館になっている。大きな一棟140坪の酒蔵、木製の仕込み樽など見るべき物が多い。順路の最後が試飲即売場になっていて、味を確かめ、夕食時のお酒を調達した。

その後、上杉神社発路線バスで宿に向う。白布温泉は開湯700年（1312年）、標高800mの高地にある。残雪が少し残り、しだれ桜が満開であった。

浴衣に着替え風呂に向った。湯滝の宿と称しているだけあって、天井近くにある三本の樋から、ごうごうと温泉がうなりをあげて、浴槽に降り注ぐ。家の風呂を満たすのに何秒もかからない湯量である。湯船は石造り。

夕食は和食膳コース（前菜・冷汁・山菜三点盛り小鉢、青さのり豆腐、米沢牛の陶板焼き、岩魚の塩焼きなど）。渡邊さんが山形の日本酒（三年熟成純米大吟醸第八代九郎左衛門）を差し入れてくれた。やわらかく芳醇なお酒が喉を包む。旨い。夕食後幹事部屋で乾いたつまみをあてに、純米大吟醸「東光」で更に盃を重ねた。

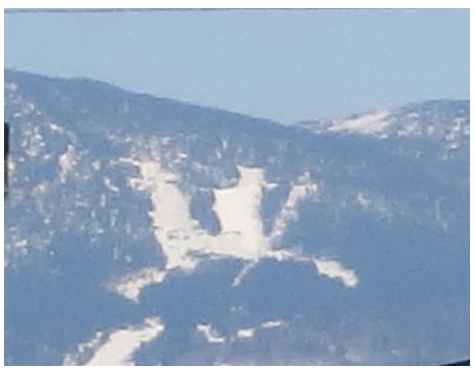
翌日も快晴である。朝風呂に入り朝食。朝食後、有志だけで歩いて10分ほどの「白布大滝」を見に行く。落差30mで水量も多く見事である。出発準備を整え、標高920mの天元台ロープウェイ山麓駅まで宿の車で送ってもらう。ロープウェイで1350mの天元台高原に行き、更に第1リフトに乗り、雪原に行く。多くのスキーヤー、スノウボーダーがシーズン最後の雪を楽しんでいた。我々も雪の上を歩き、その感触を楽しんだ。

飯豊連峰・月山などが一望できた。

山麓駅から路線バスで上杉神社に向う。上杉城史苑で米沢牛丼物の昼食をとる。

さらに観光は続く。城趾公園内の宝物殿「稽照殿」、明治43年竣工ルネサンス様式の「山形大学工学部校舎」、上杉家の菩提寺「春日山林泉寺」、米沢藩主上杉家墓所「上杉家廟所」

15時過ぎ、米沢駅から新幹線で帰途に着いた。車中から天元台方向の吾妻連峰に鎗を持ち、馬にまたがったナイトの雪形が現れていた。



旅行中ずっとお世話になった渡邊孝男さんご夫妻には感謝の念が堪えない。本当に米沢を満喫できた。

ヨーロッパ一人旅

逆井　誠（昭和44年卒）

半世紀前の古い話になりますが、１９７１年、大学2年の夏季休暇を利用して、２ヶ月間ヨーロッパ一人旅をしました。その時の記憶をたどりながらの寄稿となります。

旅の主な目的は、色々な国々を見て歩き・人と出会い、見識を深めたい、そして中学の時に始めた海外文通のペンフレンド（スウェーデン在住）に会ってみたい。アルバイト代、奨学金（東京海上火災保険の給付）の一部、そして親よりの援助等の資金を集めていざ出発。

海外旅行は、高校の時よりの夢で、大学に入ったら必ず実現しようと思っていました。当時、日本から海外へ出るにはそれなりの苦労と覚悟が必要で、ドルは貴重な外貨により、一人１０００ドルまでしか国外に持ち出すことができませんでした。1ドル３６０円の固定相場制で、１９７４年４月より変動相場制に移行しましたが、当時、日本円は海外で通用する通貨ではありませんでした。

日本からヨーロッパへの安価で人気のあるルートは2つありました。１つは、横浜より船でソビエト（当時）・ナホトカまで行き、シベリア鉄道を利用し、モスクワ経由で行くルート、もう一つは同様に横浜よりナホトカまで行き、そこから列車でハバロフスク迄行き、飛行機に乗り換え、モスクワ経由で行くルートです。

私は時間の節約等を考慮し、後者の飛行機利用の方にしました。社会主義国ソビエトは、入国・荷物検査はかなり厳しいと事前に情報を入手していたので、ナホトカでの入国・荷物検査の際に、リックサックの荷物の一番上にレーニンの書籍等を置きました。たぶんそのこともあり、比較的スムーズに入国・荷物検査が終わり一安心。今では考えられない様な事です。

その後、モスクワに一泊し、国際列車でフィンランドのヘルシンキへ行き、翌日、フェリーに乗り換えて、スウェーデンのストックホルムに到着。

港には、ペンフレンドとその家族が出迎えてくれていて、ほっとしたことを鮮明に覚えています。日本を出発してから7日目に到着。今なら飛行機で、ストックホルムまで直行便はありませんが、途中、欧州で1回乗り換えても十数時間で着くことができ、改めて時代の差を感じます。

一週間程ペンフレンドの自宅にお世話になり、一緒に名所旧跡・湖・市内等を見学。ストックホルムは、北欧のベニスと言われるくらい、森と湖に囲まれた非常に美しい街で、短い滞在でしたが、可能ならここに将来住みたいと思いました。

スウェーデンでの楽しい日々が過ぎ、事前に日本にて購入したスチューデント・ユウレール・パス（欧州国際鉄道乗り放題60日間）を利用し、まずストックホルムより鉄道で行けるスカンジナビア半島最北端の町ナルビック（北緯65度以北）へ向かいました。8月なのに山々は雪に覆われており、驚きました。

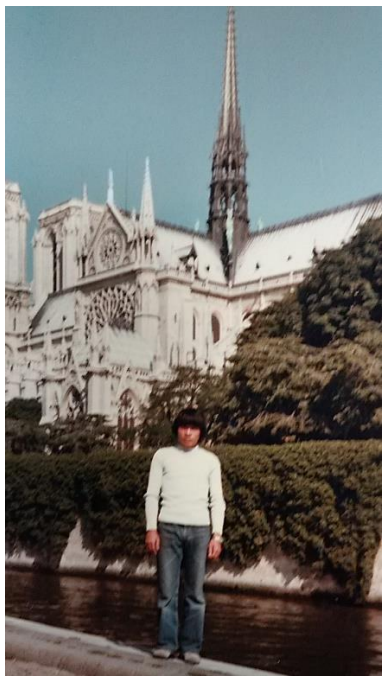
また宿泊については、移動時は車中泊（国際列車の大半はコンパートメントあり）か、日本にて会員登録したユースホステル泊（欧州は非常にユースホステルが充実）にしました。そのユースホステルで色々な国々の旅行者と出会い、情報交換することで、その後の旅行先の貴重な情報が入手できて、助かりました。勿論、事前に旅行ガイドブックとトーマスクックの列車時刻表にて、旅程表の準備はしておきました。

続いて、ノルウェー、デンマーク、オランダ、フランス、西ドイツ（当時）、スイス、オーストリア、イタリアと欧州を南下するかたちで、各国を訪問しました。そこでも、たくさんの出会い、古い歴史・文化等を肌で感じることができ、初期の目的がほぼ達成できたと自負しました。

後に、それらの大半の国々に新婚旅行等で再度訪問しました。今回、紙面の関係でそれぞれの出来事を書く事はできませんので、割愛します。

帰国ルートは、オーストリアのウィーンより国際列車にてチェコスロバキア、ポーランド経由で、モスクワに着き、往路と逆ルートで横浜に到着しました。本当に長い旅でした。

今回の旅で、色々と心配をかけ、また援助してくれた両親、そして関係の方々に対し感謝すると共に、その後の私の人生に大きな影響を与えた貴重な旅となりました。



右の写真は、パリ、ノートルダム寺院にて（２０１９年４月15日に大規模火災が発生したが、建物の主要部分は無事）

最後になりますが、旅の目的・方法等はそれぞれ人によって違いはありますが、旅の終わりに、同じ様な旅をもう一度してみたい、と思える様な旅をしたいものです。

追記：現在もスウェーデンの女性とは家族同士での付き合いをしており、来年開催予定の東京オリンピック観戦を兼ね、来日予定です。（筆者は現在内閣府勤務）

リレー放談　第８回
農業を軸とした地域創造型プラットフォームへの挑戦
伊東明彦(平成５年卒)

きっかけは、東進会の立場で参加している県人会だった。県人会では、多くの市町村がＰＲするためのブースが設けられており、それぞれの市町村のプロモーション担当職員がＰＲを行っている。私は、守谷市に在住しているので、守谷市のブースを探すが見当たらない。当時の守谷市長に聞くと、「ＰＲするものが無い」との回答！本当にそうなのだろうか・・・と思っていた。

一方は、私は、宇宙分野の企業に勤めている。私が専門とする技術は、「リモートセンシング」であり、人工衛星の多くは、この「リモートセンシング」の技術を利用しており、宇宙などの遠隔から地上を観測し、様々な現象を把握・解明する。私は、この「リモートセンシング」の技術を農業、災害時の状況把握、環境調査、国土管理、遺跡調査などに利用できると考えており、多くの新規プロジェクトを立ち上げてきた。平成17年からは、衛星とドローンを利用した農業被害への利用に関するプロジェクトも立ち上げた。ドローンの必要性・将来性を感じ、関連省庁への公募に提案していたのもこの頃である。何れにしても、農業分野への衛星データを利用した研究・実証は、常にライフワークのように行ってきており、霞ヶ関にはだいぶ通った。

もう１つのきっかけは、妻の弟が脱サラして農業を始めたこと。当時、私がＰＴＡ会長を務めていた時の副会長も同様に、脱サラして農業を始めたことであった。私は、地元でも農業分野で貢献すべきじゃないかと考え始めていた・・・。そこで、ＰＴＡの副会長と協議会を立ち上げることを決断し、少しずつ同じ思いを持ってくれそうな方と意見交換を行い、生産者の農家(妻の弟も含む)、農業組合、加工事業者、小売り事業者、飲食店、アンテナショップ等を入れて、協議会の中で６次産業化、流通に必要な体制を確保した。

２０１５年２月、守谷市の地産品に着目し、農作物・食品・健康を有機的に繋げることで、地域資源の有効活用と持続的な地域活性化の好循環を狙うことを目的とした「もりや循環型農食健協議会(略称：もりあぐ)」を発足させた。この会の拘りは、組織名からも分かるように、農業と食と健康を繋げることに、この理念は数年後、更に規模を拡大することにもなった。

最初に採択された交付金は「都市農村共生・対流交付金」であり、農業体験を行う「グリーンツーリズム事業」、生産者と消費者を繋ぐ「直販販促事業」、農家の生産物を購入し加工を行う「商品・メニュー開発事業」の３つの事業を中心に始めた。前市長のＰＲするものが無いといった発言に対しても、地域の資源を調査する「あるある分析」を行ったところ、１０００頭以上の乳牛、品評会で入賞する常陸牛の生産農家、行列ができる精肉屋、耕作放棄地等を蕎麦畑に変えていく取組み等、多くの資源・コトがあることが分かった。

更に、その後、守谷市役所からラブコールを頂き、平成29年度からは「地方創生推進交付金」に採択された。この事業により、守谷市との連携を強めるともに、地域の課題に対して、先端企業、研究機関、茨城大学と連携するアグリアカディミアを創設する「都市近郊農業モデルの構築事業」も開始した。「もりあぐ」は、確実に地域に浸透し、成果を上げてきた・・・。

想定外のことも生じた。「もりあぐ」の会員であり、地域のアンテナショップであった「守谷スタイル」が経営難に陥り、店舗を継承して欲しいとのこと。そこで、「もりあぐ」会員の中から出資者を募り、新たに株式会社もりやコレクションを設立し、守谷駅の１Ｆでアンテナショップを開業した。私にとって、初めて起業する良い経験となった。

常に新しいアイデアを出し続けること、地域の課題を解決する姿勢が評価されたのか、多くの相談を頂いており、第３、第４の新しい事業の立ち上げを準備している。最近流行りのソーシャルビジネス、ソーシャルインキュベーション的なことを自然な流れで行っていたように思える。

第３の事業について、少し紹介すると、現在、「もりあぐ」は、これまでの農・食・健の連携から、医療・福祉との連携を模索しており、守谷で挑戦的な取り組みを行う準備を進めている。この取組みに、幾つかの企業・大学・研究プロジェクトからもラブコールを頂いており、かなり注目を浴びるものと考えている。医療については、土浦一高の先輩である平野先生の在宅医療の講演に感化されたこともあり、日本最大の在宅医療の法人である悠翔会（代表者が守谷出身）と連携する予定である。確実に東進会での経験が、現在の事業に活かされている。

地域の課題に対して、解決するモデルを考案し、実証する。失敗した場合には軌道修正を行う。簡単に書けば、それだけのこと。おそらくこれまでは、霞ヶ関が政策を考え、中央集権型の構造であったが、これからは地域の時代である。地域の課題に対して、地域の人材が、地域の資源で解決する仕組みが必要であり、高校といったコミュニティは重要である。このような時代こそ、土浦一高のコミュニティを最大限に生かすべきである。同窓会の可能性・存在意義は、まだまだある・・・。

次回は、東進会総会で落語を披露してくれた、廣瀬敦さん(平成７年卒)にバトンタッチ。

もりコレ店内（上）もりあぐの仲間たち（下）